

～特集～ 地域と若者を紡いでまちを元気に



【出演者】

田村 幸大 NPO 法人なごみ事務局長

中山 光子 認定 NPO 法人宝塚 NPO センター理事長

井戸 敏三 兵庫県知事

「地域と若者を紡いでまちを元気に」をテーマに、コロナ禍における工夫を凝らした取組にも触れながら、知事と語り合っていました。(令和2年9月25日対談)

自己紹介

田村 明石市出身、西宮市在住です。関西学院大学社会学部社会福祉学科に進学しました。社会教育に強く関心があり、3回生の時、子どもと大学生だけで「自分たちが行きたくなる学校を作ろう」というプロジェクトを立ち上げ、京都にある廃校舎を借りて3日間の自由な学校を作りました。それが好評で、西宮市内の様々な地域から、同じようなプログラムを実施してほしいという要望が集まるようになりました。卒業後も活動していましたが、活動のたび、集まった子どもが再び日常生活に戻っていくのを見て、子どもたちが日常生活の中で多世代交流や、様々な大人と触れ合うような社会体験ができればいいなと考えるようになり、現在の鳴尾東地域に一つ拠点を置くことにしたのです。



田村幸大さん

知事 やはり拠点というか、“場”が必要なのですね。

田村 そうですね。当時の地域の会長に、つどい場を作らせてもらえないかと持ちかけました。二度断られましたが、交渉の末、地域も応援しようという話になり、空き家を使った多世代交流の場を始めました。

中山 東京生まれの東京育ちです。成城学園という、遊びや劇の授業があり、自治会活動も盛んな、とても自由な校風の学校で、小学生の頃から過ごしました。多分その頃にNPOの芽というか、自分たちで何かを解決するという芽ができたのだろうなと思っています。その後、結婚し、家族とともに転勤を繰り返していました。



中山光子さん

知事 宝塚へは転勤で来られたのですか？

中山 はい、転勤で。兵庫県に来たら、食べ物はおいしくて、海も山もある。人生の中で一番長く住んでいるのが兵庫県になりました。

子育てが一段落した後、コープこうべで組合員活動のお

手伝いを始めたのですが、それ以来、NPOや市民活動に触れるようになりました。その後、宝塚で家を買って、自分が住む町を自分たちで支えることができないだろうかと思っていた時に、宝塚NPOセンターの前事務局長に「あなたうちへいらっしやい」と声をかけられまして、平成22年に事務局長に、そして昨年からは理事長に就任しました。

地域交流拠点「まち café なごみ」

知事 それでは活動内容をご紹介いただきましょう。

田村さん、なぜ「なごみ」という名前をつけたのですか？

田村 最初につどい場を立ち上げた時、今のNPO法人なごみの前身になる「鳴尾東ふれあいまちづくりの会 和(なごみ)」という団体を作りました。

知事 その時から「なごみ」という名称をつけていたのですね。

田村 はい。地域の方々と一緒に、和やかな空気を作りたいという思いから名前をつけました。1年半ほど、空き家を使ったつどい場活動をしていました。

知事 NPO法人なごみは、皆さんが集まるカフェのような場を中心に活動を展開しているとお聞きしていますが。

田村 そうです。平成26年の介護保険法の改正を受け、西宮市では地域で常設型の居場所を作り、高齢者の介護予防や見守り活動の拠点にする構想を検討していました。鳴尾東地域でモデル事業をしないかと声がかかり、それを機に、任意団体をNPO法人化し、「まち café なごみ」という居場所をオープンさせました。

知事 具体的にどのような活動をしていますか。

田村 1日に50～60人ぐらいの住民が集まり、体操や介護予防活動をしています。地域の課題も集まってくるので、その課題を解決するまちづくり活動へと事業展開していきました。



「まち café なごみ」で介護予防の体操

大学生との連携で見つけた地域課題

田村 平成 28 年に関西学院大学の学生が地域活動に参加し始めたことがきっかけになりました。地域の大規模な調査が行われ、地域の担い手が高齢化していること、情報がうまく地域に届いていないこと、高齢者だけでなく、障害がある方や子育て世代の方の居場所が少ないことなどの課題を発見したのです。



大学生と地域住民との会議

知事 そこから大学との連携事業が始まったのですか。

田村 はい。当時は地域課題がすごく複雑で、どこから手をつけていいのかわからない状態でした。地域住民だけで調査するのは結構大変で、なかなか腰が上がりませんでした。ところが、学生が地域に入り、地域の人も協力して課題を整理できました。そこから課題解決に向け、学生と連携した活動が始まりました。

知事 学生と地域の人コラボして、地域課題や新しい地域支援の発見につながったんですね。

中間支援と就労支援の二輪の車輪

知事 中山さん、宝塚NPOセンターではどのような事業をされていますか。

中山 今の宝塚NPOセンターは「二輪の車輪で走っている」と言っておりまして、中間支援事業と就労支援事業の両方で活動しています。

知事 中間支援事業とは、NPOを育てる事業、あるいはボランティア活動を応援する事業ですね。

中山 そうです。コミュニティ・ビジネスを推進するNPOや一般社団法人などを支援しています。

また、就労支援では、最初は定年退職した高齢者の支援を行っていました。しかしリーマン・ショック以降、今まで一度も仕事をすることがない30代後半から40代の若い方が、



「若者サポートステーション事業」での就労体験

仕事を紹介してくれないかと相談に来られるようになりました。彼らの就労支援も大切だと思い、厚生労働省の「若者サポートステーション事業」に手を挙げて受託し、今は若者の就労支援をしています。

コロナ禍で活躍「まちのよろず屋」

知事 田村さんも「まち café なごみ」を拠点に、様々な事業を実施されていますが、特筆すべき事業はありますか？

田村 コロナ禍の活動としては、4年がかりで準備をし、昨

年7月から始めた「まちのよろず屋」事業があります。30分 500円で住民の困り事を解決するものです。地域調査の際、ボランティアセンターに相談が入りにくくなっている課題が見つかり、手伝いを頼みやすい環境を作ろうと、この事業が始まりました。1年ほど経過しますが、この事業が広く活用されています。コロナ禍で自身だけでは生活の維持が困難な方のお手伝い、例えば、買い物やゴミ捨てなどをまちのよろず屋が行っています。その他、掃除や剪定など色々な相談が入りますが、それらに答えています。

知事 ワンコインで小さな仕事を代行するわけですね。入ってきた仕事を誰に回すのかというコーディネート機能は、まちのよろず屋の事務局がされているのですか？

田村 はい。

知事 どういう方々が参加されていますか。

田村 利用者と活動サポーターというボランティア、全て住民で構成しており、世代に関係なくどなたでも参加できる仕組みが特徴です。今、活動サポーターには70名の方が登録しています。このうち60代以下の住民が83%を占めています。一番の若手は高校生で5名、大学生を含めた20代が8名、子育てママさんが9名、40代の主婦が最も多く17名登録されています。これまで地域活動は年配の方によって支えられているところがありましたが、この事業をきっかけに担い手が発掘されていることも大きな特徴です。多世代で構成するからこそ、様々なニーズに応えることができます。最近では、手持ちの扇風機を買ってきて欲しいという依頼もありました。そういう依頼は若者の方が得意だったりします。高校生はコロナ禍で休校の間、生活リズムを整えることも兼ねて、朝ごみ捨てを手伝ってくれています。

知事 よろず屋って古い名前を、よく思いつきましたね。

田村 主な対象が年配の方でしたので、今風の名前よりも、頼みやすい名前をつけた方が広がるのではないかと思います。そういう名称にしました。

知事 「まちのよろず屋」は活動をよく表している、いいネーミングですね。



まちのよろず屋

【コロナ禍では感染予防対策を施したうえで、高齢者を中心にサポートを継続】

地域と連携した若者サポートステーション事業

知事 中山さん、具体的に活動内容をお話いただけますか。

中山 はい。「若者サポートステーション」は15～49歳の若くて、無業状態の人たちを就労まで持っていく事業です。キャリアカウンセリングをしながらグループ活動を行い、皆さんそれなりに就職をされています。私たちは地域と連携しながら活動しているのですが、例えば夏祭りの際に太鼓を運んだり、やぐらを組んだりするなどのお手伝いをし

ています。少しおとなしく、これまで祭りの中心になることがなかったような若者が、何人かのグループになって地域の人たちのお手伝いをして、「ありがとう」と感謝の言葉をかけられる。それが積み重なって、就労への自信につながっていきます。



農作業体験の様子



カフェでの就労体験

知事 なるほど。仕事を頼まれた若い人たちは報酬を得るのですか？

中山 いいえ。社会体験、ボランティア体験ということで。ただし、仕事に就いていない方達なので、交通費がなかなか払えません。その場合は、私たちの団体がいただいた寄付から、交通費をお支払いしています。

知事 交通費を出す、実費弁償ですね。

中山 地域の方からの「ありがとう」という言葉に、本当に後押しされるのです。人に認めていただくことが、就労に向けたワンステップを踏み出す力になるので、地域の方との連携は本当に大きいなと思っています。

知事 どういうところに就職をされていますか。

中山 公務員など様々で、その方の希望に添った就職を支援しています。私たちは、働くことが「社会と接する窓口」だと思っています。

お母様の看病のために高校1年生で学校を中退された、30代の女性がいらっしゃいました。週2日だけ自由になる時間があり、その時間を使って働きたいと相談にいられました。週2日ではなかなか仕事がないのですが、清掃の仕事を自分で見つけられて、その就職をサポートしました。現在、彼女は週2日の清掃の仕事をする事で社会と接する場を持っています。そのようなお手伝いをしています。

知事 お二人とも、悩める若者に良い機会を提供し、その機会が大きく育っていますね。

中山 その他に、例えばふすまや畳のリフォーム会社である「株式会社あたらし」という事業者さんは、若者に理解があり、就職希望者を受け入れてくれます。作業が細分化されているため、真面目だけれども、なかなか心をうまく開けない若者が就職するのにとても良い会社です。そして正社員まで引き上げてくれるのです。

知事 それはすごいですね。

中山 私の夢ですが、業務が細分化されているような企業が地域の若者を受け入れてくだされば、地域内で経済が回る仕組みができるのではないかと思います。

今後の抱負

田村 もともと関心が高かった社会教育を決して忘れたわけではなく、地域で若い人たちが育ってきて、地域全体が元気になってゆけば、自然と社会教育がなされる場になるのかなと思っています。先の目標としては、町全体が学校のような地域を作ることです。大人は子どもから学び、子どもは年齢の異なる様々な大人から学ぶ。そんな光景が学校以外の場所でたくさん見られる地域が理想だなと思っています。そういう地域を目指して、今、活動を続けています。

知事 それは素晴らしいですね。町を舞台に学びの場を作っていきたいと。ぜひ鳴尾モデルを作ってください。

田村 ぜひ実現したいと思います。

知事 中山さんはいかがですか。

中山 コロナ禍で若者を支援する宝塚市の委託事業がなくなりました。3か月間、毎日同じ時間に家から出て、就労に関する座学を受け、地域内のボランティア活動に行くという、若者の就労支援事業です。私たちはこの事業は必要だと思い、クラウドファンディングをしたところ、地域の方からたくさんのご寄付をいただきました。まずは、この事業を進めていくことが一つの目標です。

知事 毎日同じ時間に家から出るというのが始まりなのですね。

中山 始まりです。それと、そういう若者が地域の中で仕事ができる場所は絶対あるはず。なごみさんのようにワンコインで若者が活動できて、ありがとうと言われる場。そのような場が地域のあちこちにできれば、地域のこの経済が回り、若者がそこにずっといることができます。そんな地域を作りたいなと思っています。

知事 それはありがたいことです。地域の人たちと一緒に活動を展開し、まちづくりを進めておられる、お二人から色々な話を伺いました。これからも現場の第一線で、ご指導とご協力、そして仲間づくりを進めていただきますよう、ご期待申し上げます。頑張ってください。今日はありがとうございました。

中山・田村 ありがとうございました。



【発行】こころ豊かな美しい兵庫推進会議
(兵庫県県民生活課内)
神戸市中央区下山手通 5-10-1 TEL:078-362-3136



ココロン HP 内にて、より詳細な対談の様子を動画にて配信！
「ネットワーク 知事対談」で検索、もしくは左の QR コードをスキャンしてください！



劇場×まち×多文化が溶け合う豊かな社会へ
 特定非営利法人ダンスボックス 事務局長 文(あや)さん(長田区)

NPO法人 DANCE BOX 文
 電話 078-646-7044

ダンスボックスは多様性豊かなまち”新長田”にある小劇場「ArtTheater dB 神戸」を拠点に活動しています。ここでは「コンテンポラリーダンス」を軸に、国内外のアーティストが舞台芸術作品の企画制作をおこなっています。また、まちの一員として、地域にとっての劇場の役割を考え、劇場がまちの広場となることをめざしています。劇場以外でも出張型のワークショップを行い、地域の小学校や夏祭りにも参加。最近ではYouTubeでの情報発信も開始し、「下町芸術祭」でまちの人たちと作り上げた作品も掲載しています。踊る場所や踊る人・踊らない人、年齢や性別、国籍、障害の有無などを超え、様々なコミュニケーションや表現を通じて、ともに過ごしていく社会を望んでいます。



約 120 人が入ることができる小劇場

地域から地域へ吹く風のように
 一般社団法人コチ 代表理事 二川 貴吏(川西市)

一般社団法人コチ 二川
 電話 090-4641-1403

令和2年6月に設立された一般社団法人コチは、「東風のように地域から地域へと新しい風を吹かせ、新たな活動の種を芽吹かせたい」というコンセプトのもと、北摂地域をはじめ、各地域の課題解決に取り組んでいます。

本業で映像・建築デザイン関係の仕事に従事しており、北摂地域の自然や原風景の動画制作を行う中で、都市に近接しながら昔ながらの原風景が残り、豊かな暮らしが実現できるというポテンシャルの高さを感じ、この地域に新たな人の流れを生み出すため法人を立ち上げました。

現在は宝塚市武田尾の空き家を事務所改装している最中であり、自らリノベーションしていく過程を映像に残し、その実体験を発信することで、北摂地域への移住・定住を促進したいと考えています。



里山にて動画の撮影を行うメンバー

女子大学生とともに地域活性化活動
 天船むらづくり委員会 代表 棚倉 修規(多可町中村)

天船むらづくり委員会 棚倉
 電話 090-9047-8752

北播磨の中山間にある中村集落は、少子高齢化の問題に取り組むために甲南女子大学公認の部活動「村おこしプロジェクト Country Road」の学生と活動しています。休耕田を活用したラベンダー・ハーブ栽培や加工品の開発、地域の道の駅「野菜畑のあまふね市」の立ち上げ、運営をしています。活動を通じて、活力ある地域づくりを目的とした甲南女子大学と多可町の包括連携協定が結ばれました。医療栄養学科との健康野菜「菊芋」「ヤーコン」のレシピ作り、多文化コミュニケーション学科との山田錦の栽培とブランド酒の制作など、住民と学生・教職員との交流や活動はさらに広がっています。女子大学生ならではの視点や情報発信力と住民のふるさとを想う気持ちで協力し合い、地域の活性化をめざします。



マイスター工房八千代前にオープン

町の未来は市民の力で！地域をつなぐ架け橋に！
 『しんぐう Next』 石井 靖敏(たつの市)

しんぐう Next 石井
 電話 090-8752-5314

未来の新宮は、どんな町に…。不安しかない現状を打開すべく、4年前に仲間とともに『しんぐう Next』を結成。「未来を自分たちの力で創造していく」という思いで活動しています。

主な事業は、「しんぐう☆まちあそび」、「しんぐう Next☆みらい会議」、「Next Seeds プロジェクト」。それぞれ、人や賑わい、場づくりに取り組んでいます。この活動で、地域の『人』をつなぎ、若い世代が思い描く町を、地域の方と協力し、自らが楽しみながら創っていく、そんな新しい『場』をつくっていきたいと思います。

未来を担う世代と地域全体をつなぎ、共に新しい町をつくる、そんな活動を続けていくことが、町の活性化や賑わいにつながり、新たな町の魅力づくりになる。私たちは、そのための『架け橋』になりたいと思います。



2019年 しんぐう☆まちあそび

ひとづくり、まちづくり、そして地域の活性化を
 一般社団法人丹波青年会議所 理事長 上羽 裕樹(丹波市)

一般社団法人 丹波青年会議所
 電話 0795-72-3398

丹波青年会議所は、より良いまちづくりを目標に、面白くインパクトのあることを地域に発信し続けています。

今年は中止になりましたが、2017年から水祭りイベント「SPLASH!!丹波!!」を企画し、地域内だけでなく都市部からも誘客を図り、丹波市の魅力を発信し、地域を盛り上げるイベントを開催しています。今年はコロナウイルスの影響で活動が制限される中、不要マスクの回収・配布活動や子どもたちの夢を聞きメンバーがアドバイスする「未来学」の開催、コロナ禍で最終学年を十分に過ごせなかった高校3年生の想いをのせた「ドライブイン花火大会」などに取り組んでいます。

来年は設立50周年を迎え、丹波市、兵庫の魅力を感じてもらえる大々的なイベントを計画しています。ご期待ください。



約 4,000 枚集まったマスク回収活動